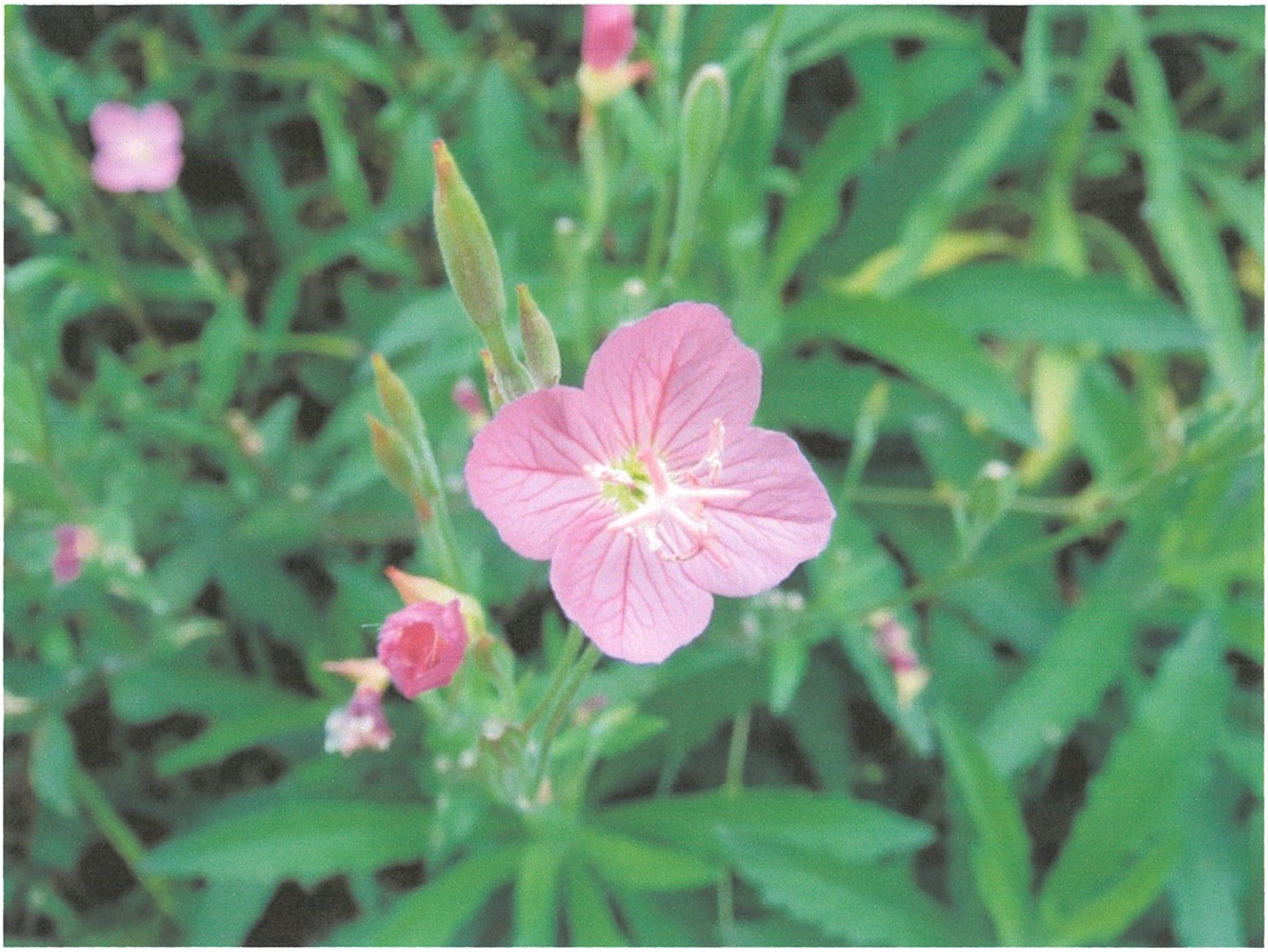
あいかわの自然誌　＜6月＞



<N0197>

ユウゲショウ（夕化粧）

近年、愛川町周辺にも急速に広がり、空き地や道路脇などいたる所でピンク色の花を見かけるようになった。

南アメリカ原産の外来植物で明治時代に移入され栽培されていたが、現在では関東地方以西に広範囲に野生化しているとのことだ。

別名をアカバナユウゲショウと言う。ケショウ（化粧）とは艶っぽく美しいと言う意味で付けられた名前だが、花はユウ（夕方）に限らず、ほとんどが昼間から開いている。

茎は高さ 50cm 前後で、上部の葉腋に直径 1.5cm ほどの花を横向きに付ける。花弁は丸く、紅色の脈や雄しべの白色も目立つ。一見して可愛いらしい印象がある。

同じ仲間に、花の大きさが4倍ほどもあり上向きに咲くヒルザキツキミソウ（昼咲月見草）がある。アカバナ科の多年草。

あいかわの自然誌　＜6月＞

<N0196>

オニシバリ（鬼縛）

オニシバリは集落周辺から山地にかけての明るい林内に自生している。初夏に出会うオニシバリは葉が疲れたように元気がなく、反面、果実は赤く艶やかに熟していて、この年の生活に区切りをつける時期となっている。やがて葉を落として夏眠に入っていくが、これを「夏坊主」と呼んでいる。

多くの植物が春から秋に成長や繁殖をするのに対して、オニシバリは初秋の頃に若葉を展開し、秋にから冬にかけて成長し、緑葉を装ったまま冬を過ごして、2月に入ると花を咲かせ、春に果実を成長肥大させる。生活サイクルとして季節を逆に使っているのだ。

樹皮の繊維が強く、幹は柔軟性があって簡単には折ることができない。この植物で鬼を縛っても逃げられないと考えたことが名前の謂われである。ジンチョウゲ科の落葉低木、雌雄異株。